



長特研だより

121号

発行 長崎県特別支援教育研究会
事務局 長崎県立希望が丘高等特別支援学校
編集局 長崎県立鶴南特別支援学校時津分校
発行日 令和4年12月23日

令和4年10月26日(木)に、たらみ図書館で、秋期研修会を開催しました。

当日は、小学校28名、中学校31名、高等学校11名、特別支援学校22名、その他1名、合計93名の多くの先生方に参加していただきました。

本号では、研修会の講演内容について報告します。

令和4年度長崎県特別支援教育研究会秋季研修会報告

演題:「知的・発達障害児の生活習慣と学校」

講師:医療法人友愛会 田川療養所 診療部審理室長
長崎県スクールカウンセラー・私学カウンセラー
前田 和明 先生

※記録は、講師の言葉をできるだけそのまま使うことで、ニュアンスが伝わりやすいようにしています。

はじめに —学校の役割について—

人は誰かと人間関係を作りながら生きている。学校は、人間関係を体験、練習する場である。学校に行っている間に、卒業後にどこかにつながるための練習をしていただきたい。

平成7年よりスクールカウンセラーとして関わっているが、当時は自殺が多かった。今と比べると子供の数は減ったが、家庭の事情や貧困、虐待、いじめ、不登校への対応など、学校がしなければならないことは多種多様であり、いろいろなニーズが増えている。学校はたいへんであるが、大事な場所である。

三障害とは(スライド2)

- 身体障害
- 知的障害(特別な病気ではない。)
- 精神障害(発達障害や自閉症も入る。)
- ・自分の弱みに気付かない人が多く、対人関係が難しくなるという特性がある。

登校・友人関係・勉強に影響することがら(スライド3)

- 病気(身体の機能不全)の場合
- ・学校に行けないときに、身体に自覚症状があったり、周囲の大人が「いつもと様子が違う」と感じたりしたら、掛かりつけの病院や内科、歯科などに行って相談するよう進めてほしい。
- ・担当している児童生徒が関わっている病院があれば、時々、学校の様子を教えると、治療の役に立つ。
- ・身体に症状があり、2、3か月続いているようであれば、ぜひ病院に相談してほしい。

○不適合の場合

- ・生活習慣の乱れで学校に行けなくなっている場合は、障害の有無にかかわらず、生活のリズムを振り返り、学校に行く生活リズムを作ることが大切である。
- ・朝、起きることができず、1日学校を休むのはもったいない。昼から学校に行ったり、朝、学校に行って具合が悪くなれば早退して帰ったりするなど、幼稚園、小中学校の間は、学校に行く練習をしていいと思う。
- ・保護者が仕事に行っている場合は、週に1回でいいので、学校に送っていったり、起こしたりしてほしい。
- ・不登校の子供は、家にいてもストレスを感じたり、家族とのコミュニケーションで問題を抱えたりすることもある。学校という場所があるので上手に学校を使ってほしい。(どこかに) 通うということは大事である。家にずっといると子供もぼける。短時間でも時間がずればよいが、学校が使えるときは、どんどん使った方がいい。
- ・家族や当事者、担任だけではなく、誰かに相談することで、いろいろな方法やアイデアが出てくる。

発達障害とは (スライド 4 ~ 10)

- 注意欠陥多動性障害 (ADHD)
- 自閉スペクトラム症
- 限局性学習症 (学習障害)

- ・大人も子供も、様々な薬が出ているが、薬を飲ませたら安心ではない。
- ・子供はお互いに反応し合うし、集団と個人の間にはいろいろある。発達障害と診断名がついて薬を飲んでいても、一人のときは何も無い。集団に入るからこそ、いろいろなことが生じてくる。

発達障害の特性 (スライド 6 ~ 10)

ADHDを中心に 見る、「生きづらさ」	学校では?	職場では?	家庭では?
不注意がもも とで予想される トラブル	・授業に集中出来ない ・教科書類の忘れ物	・仕事上のミス ・仕事の締め切りを守らない ・仕事の投げ出し	・片づけられない ・金遣いの荒さ ・約束を忘れる
多動がもも とで予想される トラブル	・手まげ ・私語 ・そわそわ、授業の邪魔	・会議中のそわそわ行動 ・議題以外での話しかけ	・すべきことの優先順位を見失う ・無計画な家事
衝動性がもも とで予想される トラブル	・大声 ・立ち歩き ・スマホいじり	・失言、不用意発言 ・独断による勝手な判断	・いらぬものを買ってしまう ・ささいなことで家族を叱る

- ・発達障害の人は、よく映画でも取り上げられることが多い。
(例：アルジャーノンに花束を、裸の大将、男はつらいよ)

○知的障害の特性を踏まえた作業の仕方

- ・手順を示す、見本を見せる、工程を一つずつ教えていく、休憩を入れることででき率が上がる。

○自閉症、発達障害の特性を踏まえた作業の仕方

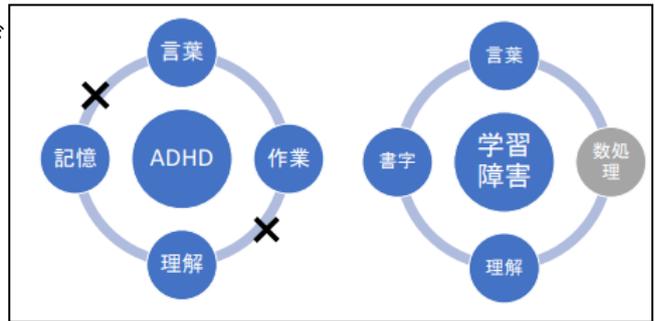
- ・自分が得意なこと(こだわっていること)は、一日中できるので、自分がやりやすい仕事、気に入っている仕事からやらせてもらう。
- ・ここ一番と言うとき、得意なときに出して、才能を発揮していただくといった具合に、場面、役割を具体的に決めてあげて、お願いし、フォローしていくことが一番いい。

発達障害の理解（スライド 11）

- ・トラブルをわざと起こしているのではない。
→ 場面で、まずかったり、スキルをもっていなかったりということである。
- ・「反省が足りない」「努力しない」のではない。
- ・生まれつきの発達のアンバランスがある。
→ 適切な支援を受けることでトラブルを回避できる。特性を理解してやっていくことが、とても大事である。

ADHDと学習障害（スライド 12）

- ・少し乱暴な言い方になるが、ADHDは、能力はあるが有機的にネットワークできていない、回路の問題がある（つながりにくい）状態である。
- ・学習障害は、一部の能力が未成長である。



本人と家族を支援する（スライド 13）

- ・診断を受ける（掛かりつけの医院や病院）
- ・治療や具体的な対処法（精神科、心療内科、精神保健福祉センター）
- ・自立や仕事（若者サポートステーション、障害者職業センター）
- ・生きづらさを語る（「やまぼうし」「つどい」、相談支援事業所）
※同じような立場の人たちと語ることが大切である。

卵が先か？ニワトリが先か？（スライド 14）

- ・病気だから登校できないのか？
→ 病気なら治療をしてください。
- ・登校できないから病気なのか？
→ 学校に行けなくても、学校以外の場所に行けるのであれば、行けるところに行ってもらっても練習の一つになる。ずっとは良くないが、一時期のリハビリテーションとして、家から出す、通うということをやったこともある。
- ・ゲームやスマホのせいで学校にいけないのか？
→ ゲームをしながら登校している生徒もいる。

生活習慣の時間・活動を見つめ直す（スライド 15、16）

○時間の生活リズム

- ・就寝、起床、食事（特に夕食）の時間を家族で見直してみるのが大切である。

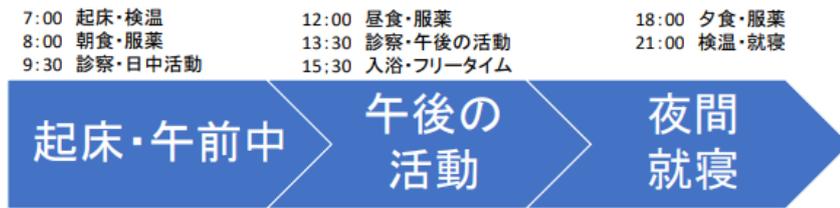
○活動の生活リズム

- ・日中と夜間（活動の量が違うのか同じなのか、季節によって違うのかなど見直してみる）
- ・生活スキル（歯磨き、入浴、着替えなど）
- ・外出や通所（家からどこか通うという生活スタイル）

※通う場所や、通って行って過ごす場所に仲間がいるのか、卒業後に行くところがあるか、なかなか見つからないので見付けておくことが大切。

入院生活をのぞいてみると（スライド 17）

時間で運用されるスケジュール例



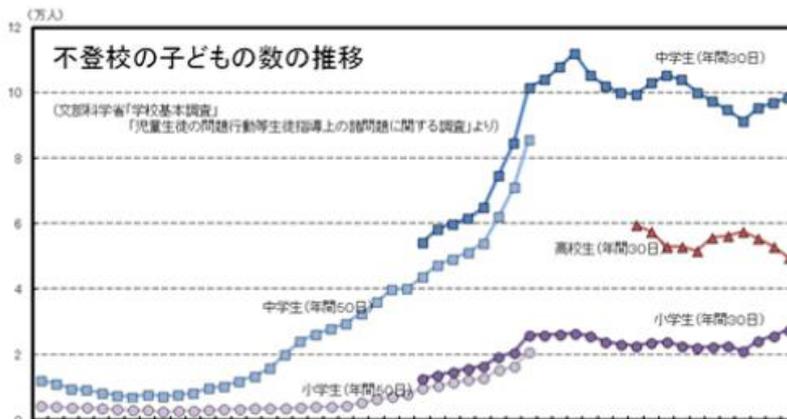
※このような生活リズム、スタイルを強制的に 2 か月くらいすると整うが、問題は退院してからである。自分や家族が管理をしなければならない。

自己評価に合わせたベスト（スライド 18）

○100 点満点の自分でなくてもよい

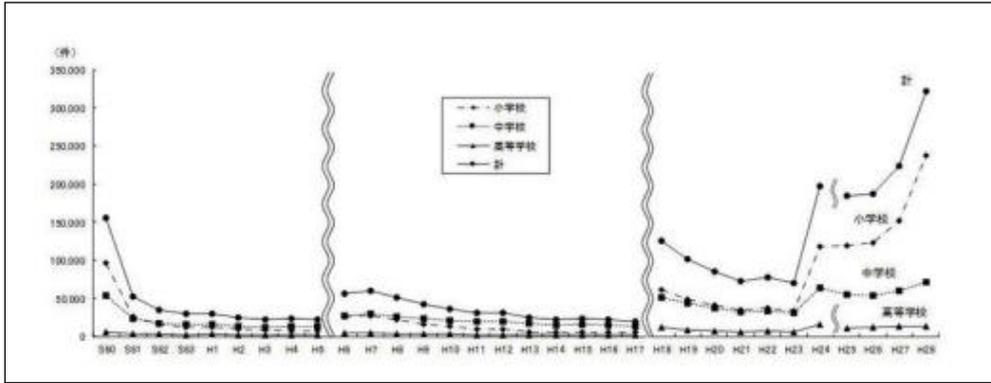
- ・良かったときを 100 点としたときに、今の自己評価が 40 点であるとする。100 点になるのは無理でも大事なものは、40 点できるというのであれば 40 点はしなければだめである。段々、30 点、20 点、10 点となる。
- ・（登校が難しい）40 点の子供には、週のうちの○曜日と○曜日は来るというような枠組みを一緒にしてやった方がいい。気分のいいときにおいでとか、週に何回か決めないけれどおいででは絶対に来ない。
- ・週の決めた曜日に遅れてでも学校に来て、居れるようであれば教室に行ってもいいし、だめであれば別室でもいいし、勉強が分からなければ手が空いていれば先生が教えるというように、何にしろ出てきなさい、という話をしていただきたい。
- ・大抵の生徒は、学校に来れば何とかなる。親子の生活リズムが合っていないと、親の方が先回りして休ませてしまうことが結構ある。

不登校児童生徒の推移（スライド 19）



- ・不登校の児童生徒は昔からいるが、平成7年度より基準が決まり積極的に数えるようになって、増えているように見える。
- ・取り出しや抽出、個別指導など特別支援教育に近いようなことを運用でやっている学校が非常に多い。
- ・昭和の頃は不登校の生徒は「怠け者」と呼ばれていて、数えられることはなかった。社会との接点をなくしたまま卒業していった生徒が、今の8050問題となっている。

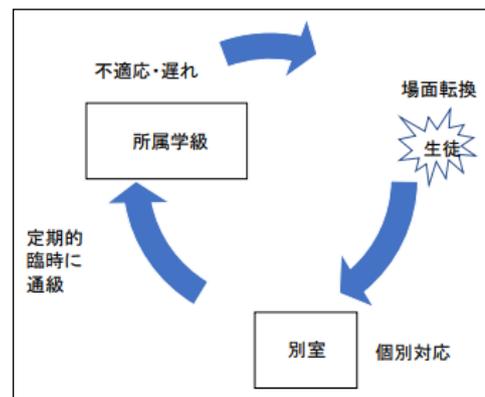
いじめ児童生徒の推移（スライド 20）



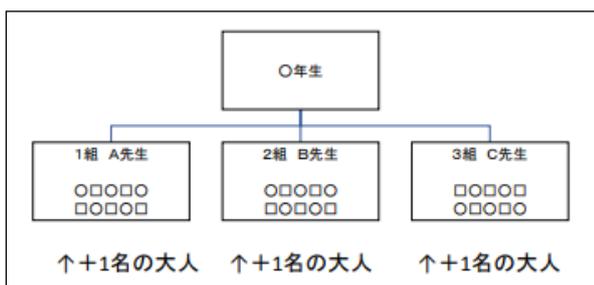
- ・いじめは減っているように見えて減っていない。
- ・現象はあるが、数えにくいので、手が打てない状態。
- ・今は、ダイレクトメールやSNSなど、目に見えないもので、寄ってたかっていじめられることが増えている。特に、中学生は気を付けていただきたい。長崎市内の中学校ではスマートフォンは持ち込み禁止となっているが、家庭では使い放題となっていることが多い。学校に持ち込んで、問題が発生することが多いので、ルールの確認をしておく必要がある。今どきのいじめは、ますます分からないようになっている。

通級・集団指導と個別指導（スライド 21）

- ・教室以外のもう一つの居場所が認められるようになった。
- ・障害の有無にかかわらず、集団と取り出して少人数で指導してもらえるようになった。
- ・措置して行っている場合と、運用で行っている場合がある。
- ・適応指導教室が、学校外にもある。



チーム小学校の現状（スライド 22）



- ・小学校は学校全体のマンパワーが少ない。
- ・誰か一人大人が入ってもらっただけで大分違う。学習指導員など正規のルートで入っている方もいらっしゃるが、加配には限りがある。一方、地域には、元気なお年寄りがたくさんいらっしゃり、老人会も盛んである。お願いして交代で時々来てもらって、教室の後ろに立ってもらっただけで全然違うので、そのようなことができればと思う。

チーム中学校・高校（スライド 23）

- ・中学校は貧困、虐待など家庭のいろいろな問題が入ってくる。小学校よりマンパワーは多いが、中学校もマンパワーがほしい。
- ・高校は個別指導がメインでできにくいところがある。逆に、それを手厚くして生徒を募集している学校もある。



医療ともチームを組みたい（スライド 24）

- ・病気の場合は医療、安心や安全（生活保護の手続きや虐待など）の場合は福祉、自傷他害（手首を切った、虐待で殴られたなど）の場合は警察を利用するなど、学校のマンパワーが足りないときは補ってほしい。

卒業までにしたいこと（スライド 25）

「生きる力」と「生きる条件」を卒業までに一つでも多く揃えてほしい。

「生きる力」と「生きる条件」は、家庭と学校の共同作業がないと、なかなか揃わない。

二つが揃うと自己決定ができるようになる。住む場所を選べる、仕事を選べる、パートナーを選べる、いろんなことを選べる。卒業して子供たちが進む学校や就職先を自分で決められるように、学校と家庭が協力しないとどうにもならない。

○「生きる力」 ※学校でリードして、支援しながら身に付けてあげなくてはならない。

・コミュニケーションの力

（自分の気持ちを相手に伝える、相手の気持ちが自分に伝わる。互いに思いやって立ち回りができる。）

・生活スキル（自分の身の回りのことが自分でできるかどうか。）

・記銘力（習って覚えること。個別に課題を出してもらって、短時間でも個別指導の時間があると全然違う。）

○「生きる条件」 ※家庭で、家族でやってもらうしかない。卒業した後どこにつながっていくかということ。

・地域での居場所（卒業後に進学するか、就職するか、作業所に行くかなど具体的に決まっていることが大切）

・地域での役割（就労するか、福祉就労するか、学生になるかなど、具体的に決めないと先に進まない）

・いくらのお金

（自分で稼いで自立できることが一番いいことではあるが、福祉制度を利用していい。そのための条件を整え、手続きができるようにしなければどうにもならない。）



講演後は、会場の先生方から多くの質問があり、一つ一つ丁寧に答えていただきました。ご多忙の中、講師を快く引き受けてくださった前田先生に、改めて感謝申し上げます。

【おしらせ】

■長特研のホームページが公開中です。この長特研だよりもホームページで観ていただいている方が多いことでしょう。御意見、御要望などありましたら、ホームページ上の「問い合わせフォーム」を使ってお問い合わせください。よろしく申し上げます。 ホームページ URL <https://choutokuken.com/>

■九特連沖縄大会がオンデマンド配信中です。令和5年3月31日までの配信です。申し込み方法など詳しくは長特研ホームページを御覧ください。